

1 教師の思いを伝えよう

その思いを伝えよう

まずは、教師の思いを伝えること、そこから全てが始まります。

「生徒が話を聞いてくれない」、「指導って難しい・・・」など、授業を進めながらいろいろな課題に直面することがあるでしょう。そんなときは、互いの考えをぶつけ合い理解し合うことが必要です。教師が本音を語れば、生徒もついてきてくれるはずです。

教師は「教えるプロ」です。プロとして、堂々と思いを伝えることが授業づくりの第一歩です。 → 2章-2

授業を通して伝える思いとは

授業は、教科・科目という形で整えられ、知識や技能を伝えるとともに自ら学ぶ力を引き出す時間ということができます。

その教科・科目を学ぶことにどのような意味があるのか、学んだことがどのように役立つのかなどを教師が語ることで、生徒は、教科・科目に親近感を抱くはずです。

はじめに伝えておくべきこと

何事もはじめが肝心です。1年間の授業を通して、何を学ぶのか、はじめに生徒に話しましょう。生徒との課題の共有が楽しい授業につながります。

また、教師と生徒と互いの準備があってこそ良い授業が実践できます。授業での約束事もしっかりと確認しましょう。

個別支援
が必要な
生徒への
対応を考
えよう

学習スタイルの違いに配慮しよう！

視覚、聴覚、運動感覚等、認知特性の違いから人によって学び方には、得意・不得意があります。“熱い思い”は伝えても、教師自身のこれまでの学び方が、全ての生徒に合っていると限らないので押し付けにはならないようにしましょう。

→ 1章-6



<例> 国語科の授業開き

国語科での授業開きの実践例を紹介します。

教師と生徒で創る国語教室

持ち物（教科書、ノート、辞書等）の確認をきちんと行い、この授業での約束事の確認をします。

縦書きは、日本の文化の一つ

例えば、古典（古文・漢文）の授業で、教師が日本の伝統文化に自信を持って授業に臨むためには、ノートは縦書きにして、学習させたいものです。縦書きの文化に触れさせることも国語科の授業で大切なことです。

目からウロコの漢字の話

生徒が身近に感じる「国語の知識」として、“漢字”があります。漢字の豆知識を話すだけでも、教師が国語に情熱を持っていることが伝わります。

言葉で説明することの楽しさと難しさ

言葉に興味を持たせるために辞書の話が有効です。

例えば、「もしもあなたが辞書の執筆者だったら、“心”の解説は何と書く？」という課題を出します。辞書の解説のように、端的に分かりやすく、表現する活動を通して、言葉への関心を深められます。

また、言葉によって日常生活が成り立っていることを、教師自身のエピソードを交えて話してもよいでしょう。

言葉は磨けばピカピカに光ります。鏡のように、その人自身を映す道具にもなります。反対に、使い方を間違えれば、言葉によって人を傷つけてしまうことにもなります。国語の授業では、言葉の大切さ、奥深さ、おもしろさを生徒に伝えましょう。

☆授業開きとは

授業開きは、生徒との出会いの瞬間です。最初の1時間の演出で、1年間の授業が決まるといえるくらい、大切な瞬間です。

また、長期休業明けも、気持ちを新たにするときですから、教師の思いを伝えるとよいでしょう。

あなたが伝えたい「思い」とは？

「生徒とともに生涯かけて成長できるような教師になりたいと強く思いました。」

「全員が参加して、互いが学び合える授業づくりと環境づくりに努めたいと思います。」

これは、神奈川県教育委員会で行っている「かながわティーチャーズカレッジ」（教員志望者のための講座）における、ある日の感想です。皆さんも、このような“熱い思い”を持って教師になったことでしょうか。その思いを生徒に伝えてください。